

卷頭言

皆様、こんにちは。玄田英典と申します。2004年3月に東京大学で博士号を取得しました。それ以来、「New face」の執筆依頼がいつ来るかと21年間待っていたら、先に「卷頭言」の依頼が来てしまいました。せっかくなので、冒頭はNew face風に挨拶しつつ、ここでは少し昔話をさせてください。

私が大学院生だった頃、デジタル化が急速に進みました。たとえば学会では、OHPからノートパソコンによる発表へと切り替わりました。私も修士課程の時は、ノートパソコンを買ってもらえたのでOHPを使っており、OHPは事前に作成しておく必要がありました。一方、現在は発表直前までスライドの作成や修正が可能なため、他の人の発表に集中しにくい、といった副作用も感じます。また、当時は、読みたい論文があると、図書館に行ってコピーを取る必要がありましたが、今は容易にPDFをダウンロードできます。図書館に行くのも、コピーを取るのも手間だったので、本当に読みたい論文以外は複写せず、せっかく労力をかけて入手したものだから隅々まで読もうという覚悟も生まれました。便利が過ぎると弊害も出る、そんな実感があります。

大方のデジタル化が一段落した今、ChatGPTに代表される大規模言語モデル(LLM)が、研究やその周辺業務を大いに助けてくれるようになりました。私も計算コードのデバッグや簡単なスクリプトの作成に用いていますし、英語メールも要点を日本語で伝えるだけで整えてくれます。もっとも、相手方もLLMで返信をしている可能性を考えると、「ジョジョの奇妙な冒険」第3部から出てくるスタンド同士が本人に代わって戦う世界観を彷彿とさせます。研究の情報収集やアイデア出しでも大変重宝する一方で、首をかしげる回答が返ってくることもあります。20年以上この業界にいる経験から、私は誤りをすぐに見分けることができるので「良いとこ取り」ができていますが、学生がLLMに頼りすぎることには懸念があります。

LLMは進化を続け、今感じている問題は将来には解消されるかもしれません。ただ、この流れが行き過ぎると、修士論文の謝辞に、「研究のアイデア出しからテーマ決め、研究計画から結果の吟味まで、ChatGPT23.0に指導していただき感謝します。また、玄田教授には、ノートパソコンをご手配いただき感謝します。」と書かれる日が来るかもしれません。今後、指導教員としての存在価値をどこに見いだすべきか、今度、ChatGPTに相談してみようと思います。

玄田 英典(東京科学大学)